

水牛通信

VOL.3 NO.6
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

- カタロニアのこと 濱田滋郎 2
- カタルーニャ讃歌—水牛ミュージック・コンサート② 4
- カタルーニャ讃歌—コンサートのために 5
- 楽譜
- エルス・セガドルス 11
- 棒杭 12
- ガウデーの依頼主 北川フラム 13
- 水牛楽団のページ 16
- 境川私記(三) 堀田博之 17
- 流れ去った悲哀—過ぎし時代の歌謡(四) 高銀 21
- 金芝河氏の出獄所感 25

カタロニアのこと

濱田滋郎

カタロニアは、スペインの東北部、つまり
いちばんフランスに近いところに位置してい
る。文化の中心地がバルセローナ、四つの県か
らできていて、面積はざつと関東地方ぐらい。
ただし、あまり平らな土地柄ではなく、まず
は丘陵地帯といったところか。北の方、フラ
ンスとの国境にだけはピレネー山脈が高くそ
びえている。乾燥した高原のイメージが強い
スペインの中では雨がよく降り、小麦、ブド
ウ、オリーブ、オレンジ、コルクほかを産出
する。スペイン全体からみれば豊かな土地と
言っていえないこともないが、けつして農業
地帯ではない。むしろ、昔から、バルセロー
ナ（スペインではマドリードにつぐ第二の都
会）を中心とした商工業主体の地方である。

カタロニアの住民たち——少なくともその
過半数——は、カタロニア語を日常に話して
いる。けつして、カステイリヤ語（いわゆ
るスペイン語）ではない。そして、カタロニ
ア語を、不用意にカタロニア方言などと言っ
てはいけない。この言語は、イタリヤ語、フ
ランス語、スペイン語、その他と同様ラテン
語を根とする独立した樹なのだから。行政区
分上のカタロニアに話を限らず、もつと広い
範囲に広がる「カタロニア語文化圏」を対象
にするなら、この言語を話す人びとの数は五
百万人にも達するのである。

地中海に浮かぶバレアレス諸島（マジヨルカ、
メノルカ両島など）から、北はフランス領の
一部であるルシヨン、ごく小さい独立国家ア
ンドラ、そして地中海上を東へへだたり、イ
タリヤ領サルジニア島の一部にまで及ぶ。す
なわち、カタロニアはかつて中世後期（十ない
し十五世紀）を通じて、地中海の「強国」とし
て君臨した過去を持つている。だからこそ、
地中海の西部一帯にそれだけ多く、カタロニ
ア語を話す人口が行きわたっているのである。
なんとしても特筆しておかねばならないのは、
十五世紀の末からカステイリヤつまり中央
スペインの主権に半従属を強いられた形とな
つてのち、現在までついに国家としての独立
を見ずに来たカタロニア人が、自分たちの言

葉を忘れなかつたという事実である。言葉を
伝えてきたということは、すなわち、彼ら独
自の精神的遺産をも伝えてきたということな
のだから。

そして、この言語が生きてつづけてきたのは、
まさに積年の受難に耐えながらであった。十
七、八世紀を通じてカタロニアはしばしば独立
ないし自治権獲得のための闘争に立つたが、
結果はつねに悪く出た。一七一三年には、そ
れまで存在したカタロニア自治政府がカステ
イリヤ王家によって解散を命じられ、カタ
ロニア語の公的使用が禁じられた。その後の
いきさつは略するが、ともかくカタロニアに
自治権がよみがえったのは、延々二百余年を
経た一九三二年、その前年スペインに誕生し
た民主的共和政府が、それを認めたときであ
る。

しかし、周知のとおり共和政府はわずか数
年後、蜂起した極右勢力（フランコ軍）に激
しい市民戦争のち倒される。このとき最後
まで対ファシストの戦いをつづけたのは、カ
タロニアであった。カタロニア人はこのとき、
民主主義のため、自由のため、そして捨てて
はならない自治権のためにこそ、戦つたので
ある。だが、結局は敗れた彼らにとって「フラ

ンコのとつた措置は以前よりさらに苛酷なも
のだった。自治権はおろかカタロニア語にも
とづくあらゆる文化活動（出版など）が禁止
された。一九六三年頃からようやく締めつけ
もゆるんでか、ぼつぼつカタロニア語による
著作なども現われ始めしたが、カタロニア人
の待ちに待った「ジェネラリタート（自治政
府）」復活が実現したのは、フランコの死後
二年、一九七七年になってからである。……
こんにち、フランコ時代に作られた地図を手
にバルセローナを訪れる人は、おそらくまご
まごするのであるう。自由を得たカタロニア人
たちは、その喜びを現わすために、スペイン
語でつけられていた町の名を、いまや片端か
らカタロニア語に変えているのだから。

——今回のコンサートで歌われる歌、奏で
られる楽曲のほとんどは、右のような歴史を
もつカタロニア人たちが、果てしない主権回
復の夢と希望をあすに托しながら生み出した
ものである。一曲一曲の説明はべつに行なわ
れるはずであるが、ここでひとつ、ぜひおぼ
えていただきたい名前として、十九世紀の音
楽家ジョゼ・アンセルモ・クラベ（一八二四
——七四）がある。彼は一般の働く人びとを
集めて合唱団を作り、カタロニア語の詩をも

つ美しい歌の数かずを歌わせた。十九世紀後
半のカタロニアには、「レナシエンサ（ルネッ
サンス）」と呼ばれる郷土文化の復興運動が湧
きおこつたが、文芸とならび、音楽によるそれ
がいちじるしかったのには、種をまいた人、
・A・クラベの功績が大きい。アルベニス、
グラナドス、モレーラ、ミリエート、カザル
ス、モンポウたちをはじめ、数多い「サルダ
ーナ」の作者たちも、あるいはライモンヤリ
ヤックなど現代の「ノヴァ・カンソ」（新しい
歌）の担い手たちも、つまりはクラベの子で
あり、孫であり、曾孫であると言える。

言い遅れたが、カタロニア人は原住民イベ
ロ族の血をもとにギリシヤ、ローマ、カルタ
ゴ、ゴート、アラブ等々の血が微妙にまじり
合つて形成された、文化的にはラテン系の民
族である。フランスと中央スペインに両側か
らはさまれながら生きて来た彼らの気質的な特
色は、思慮分別につながる「心静けさ」と、
思いきつた行動につながる「激情」の一見相
反した要素を、あざやかに配合し使い分ける
才能にあるといわれる。多彩な美と力をひめ
た彼らの音楽にも、まことによく、その反映
が見てとれるのではなからうか。

カタルーニヤ讃歌 水牛ミュージック・コンサート 第二回

6月25日(木)午後7時開演

中野文化センター (ただし午後6時から、粟津潔の映画「ガウディ」を上映します)

7月9日(木)午後6時半開演

長野県勤労者福祉センター (長野在住のギタリスト岩村通康氏をくわえて)

司会 林 光 ゲスト 小原聖子
監修 濱田滋郎

フェデリコ・モンポウ作曲

— ピアノ 高橋悠治 —

盗賊の歌

カニゴーの山

カタルーニヤ賛歌

ミゲル・リヨベート編曲

ナルシソ・イエベス編曲

イサーク・アルベニス作曲

— ギター 小原聖子 —

棒杭

七四年四月

リュイス・リヤック詩/曲

— 水牛楽団 —

ゲルニカ

— 水牛楽団 —

— ピアノ 高橋悠治 —

— 水牛楽団 —

なげき、またはマハと夜うぐいす (組曲「ゴ

イエスカス」より)

— エンリケ・グラナダス作曲

— ピアノ 高橋悠治 —

〔第一部〕

人と水牛/祖国 (アン・バヤン・コ)

— 水牛楽団 —

林 光のコーナー 鳥の歌 ほか

— 水牛楽団 —

聖母の御子

— 水牛楽団 —

ブラーニ (哀歌)

— 水牛楽団 —

歌と踊り 第三番

— 全員 —

カタルーニヤ讃歌——コンサートのために

カタルーニヤ地方はスペイン東北部、フランスとの国境に近いに位置する。固有の文化と言語をもち、かつてはカタルーニヤ王国として独立していた。この独立がくずされたのは十六世紀——以後はスペイン中央政府の支配のもとで、スペインの一地方として生きつづけてきた。

しかしカタルーニヤ独立の精神は、いまもおとろえていない。ゆたかな文化的伝統、なかでもカタルーニヤ語への誇りが、かれらの根づよい独立への意志をささえてきた。

カタルーニヤ語はスペイン語(カステイリヤ語)の方言ではなく、これと同格の俗ラテ語の一派なのだ。スペイン中央政府はこれ

までも何度となく、カタルーニヤ語の使用を禁じてきたが、住民たちの抵抗にあつて失敗した。これから歌われる歌のほとんどは、スペイン語ではなく、無傷のカタルーニヤ語によつて歌いつがれてきたのである。

フェデリコ・モンポウ

「歌と踊り」第三番

フェデリコ・モンポウは一九九三年、バルセロナで生まれた。いま八十八歳。

バルセロナはカタルーニヤの中心都市である。「街を歩いていると、ヨーロッパの都市では感じられない明るさがあった」と粟津潔がかいている。かれはこの都市が生んだ建

築家ガウディの仕事を見るために、バルセロナをおとすのだ。

「夕方になると若者が、ローマ時代の城壁に集り、そこでギターを奏し、歌をうたう。旧市内は、細い石畳の路地が迷路のようにつづく。外敵を防ぐ、中世そのままの防壁の町づくりが、手にとるように見える。ひとびとは、九時頃から夕食を楽しむ。この街の夜は長い」

モンポウは一九二一年から四一年まで、パリで活動していたが、その後、バルセロナにもどつた。みずから「プリミティヴィスタ」と称しているが、最小・単純な手段によつて最大の表

現を、という意味だろう。カタルーニヤの四季、自然のなかの神秘的な力に題材をとったピアノ曲がおおい。小品作家だ。

カタルーニヤ民謡による連作「歌と踊り」は、ぜんぶで十四曲ある。それをかれは一九二〇年代のはじめから七〇年代まで、五十年がかりでかいた。第三番のものになっているのは「聖母の御子」——よく知られたカタルーニヤのクリスマス・ソングである。

リエゴの讃歌

一九三〇年代の後半、スペイン市民戦争のなかでたくさんの歌が生まれ、たくさんの歌がよみがえった。これもそのひとつ。

リエゴ・イ・ヌーニエスはスペインの軍人で革命家。ナポレオンの侵略にたいしてたたかい、一八一二年の革命にさいしては、絶対王制と教会権力にたいする反乱のリーダーとなった。やがて革命はついでた。かれもとらえられ、一八二三年にマドリッドで処刑され

た。

兵士たちよ、祖国が
たたかいにわれらと呼ぶ
祖国にかけてわれらは誓おう
勝利、しからずんば死あるのみ、と

胆落ち着けて、ほがらかに
いさましく、大胆に
いざ歌おう、兵士たち
たたかひへの讃歌を
われらが歌の抑揚を
全世界がおどろき讃えよ
そして、われらのうちに
エル・シッドの子らを見よ

この歌はリエゴ隊の行進曲だったが、のちに一九三一年、スペイン第二共和国の国歌となった。スペインの「ラ・マルセイエーズ」ともいべき歌である。

人民の息子

カタルーニヤはゆたかな土地だ。早くから工業が発達し、十九世紀末には膨大な工業ブ

ロレタリアートが出現し、そのほとんどがやがてアナーキズムに組織された。スペイン中央の国家権力への憎悪、自治の要求など——カタルーニヤの歴史がおびただしいアナキストを生みだした。そのアナキストたちのもっともよく知られた軍歌が「人民の息子」である。

一九三六年十一月、マドリッド防衛戦のなかで殺されたアナキスト軍団の指導者ドゥルテイの遺体が、黒赤の旗につつまれて、バルセロナにもどってきた。あつまつた群衆は別れの挨拶としてこぶしを突きあげ、雨のなかでこの歌をうたった。

エルス・セガドールス（刈り入れ人たち）

中央政府にたいする反乱にたちあがったカタルーニヤの農民たちの歌。のちにカタルーニヤ共和国の国歌になった。

エプロ川の遺跡

カタルーニヤに隣接するアラゴン地方をなされる川。ナポレオン軍にたいするバルチザンの歌として生まれた。

エプロの一連隊が

ルンバ・ラ・ルン・バ・バ
ある晩 川を渡った

アイ・カルメラ・アイ・カルメラ
そして侵略者の軍勢に

ルンバ・ラ・ルン・バ・バ
痛棒をくらわした

アイ・カルメラ・アイ・カルメラ

一九三八年七月二十四日、このエプロ川をはさんでの戦闘で、国際義勇軍がファシスト軍に敗北し、国際連盟の仲介によって国境のそと、フランスに逃れた。これがスペイン共和国の最後のたたかいになった。

パウル・デッサウ「ゲルニカ」

デッサウは現代ドイツの作曲家で、一九八〇年に死んだ。亡命中に劇作家ブレヒトと会い、「胆つ玉おつ母とその子供たち」や「屠殺場の聖ヨハンナ」の作曲をした。ブレヒトがスペイン市民戦争を題材とする戯曲「カールおかみさんの銃」を発表したころのことである。

ブレヒトはスペインにはいかなかったが、デッサウはいつたらしい。ドイツを亡命したコミュニストたち「テールマン軍団」の歌をつくり、また、ピカソの「ゲルニカ」にせつしてこの曲をかいた。

ちなみに、デッサウは戦後にもブレヒトの放送劇「ルクルスの断罪」を作曲しているが、それはすべての国の戦争犯罪人を断罪して、つぎのようにしめくくられていた。

そうとも奴を抹殺せよ！
このさきいつまであいつらが
奴とその同類のひとつでなしどもが
人間の上におさまつて
ものぐさな手をふりかざし
むごい戦争をひきおこし
民衆同志をぶつけあわせるのか？
そうとも奴を抹殺せよ！

「鳥の歌」

一九七一年十月二十四日、カザルスが国連会議場でこの曲をひいた。

カタルーニヤは音楽のさかんな土地柄である。スペインに近代音楽を開花させたのは、

イサーク・アルベニスとエンリケ・グラナードスという二人のカタルーニヤ人だった。ギターのリョベート、チェロのカサド、ピアノのラローチャ、ソプラノ歌手のアンヘレスにいたるまで、カタルーニヤの音楽史を語るだけで、そのままスペイン音楽史ができあがるくらいのものだ。

パウ・カザルスはその代表的なひとり。一八七七年にベンドレルで生まれたチェリストである。パプロはカステイリヤ語、カタルーニヤ語ではパウという。「鳥の歌」はカタルーニヤのクリスマス・ソングである。

こよなく幸せな夜、至上の光が
輝きをめるようすを見て
鳥たちは歌いながら祝いつどう
甘やかな声たずさえて
鳥たちは歌いながら祝いつどう
甘やかな声たずさえて
抑揚よろしく歌いながら
鳥たちは告げる
「イエスさまがお生まれだ
われらを罪から救い給い
歓びを与え給うために」
ウソがうたった

「おお、マリアの御子の
美しいこと、可愛いこと！」
ツグミが陽気にいった
「死は征服された
わが「生命」は生まれ給うた」

カザルスは国連でこの曲をひき、あつまつた鳥たちは「ピース！」「ピース！」と鳴きかわしているのだ、と注釈した。かれは九十四歳だった。そしてこれがかれの最後の公開演奏になった。

聖母の御子

カタルーニヤとギターの結びつきは古い。書かれたものからだけ見ても、十五世紀にまでさかのぼることができる。

フェルナンド・ソルやフランシスコ・タレガから、ミゲル・リョベートやミリオ・ブジョールにいたる、カタルーニヤ楽派ともいうべきギター音楽の流れがあり、カタルーニヤの民俗音楽をよりどころにして、めざましい発展を遂げてきた。

「聖母の御子」はカタルーニヤのクリスマスの歌（ナダルとよばれる）で、ミゲル・リ

ョベートがギター用に編曲した。フェデリコ・モンボウのピアノ曲にもつかわれていることは、はじめにのべたとおりだ。

聖母の御子になにあげる？

おいしいものをあげましょう

乾ブドウ、イチジク、クルミ、オリーブ、

ハチミツ

マリアさまの御子になにあげる？

美しい王子さまになにあげる？

はかりに入れた乾ブドウ

パンかご一杯のイチジクをあげましょう

それから歌

心をこめた美しい歌をあげましょう

プラーニ（哀歌）

これもリョベートがカタルーニヤの古い歌を編曲したもの。つぎの「盗賊の歌」もやはりリョベートの編曲である。自治権を失った故郷をかなしむ歌のひとつ。

ああ カタルーニヤよ

その昔はほこり高く

すつくとひとり立ちしていたものを
いまはただ泣くがいい

主権を失なってしまったお前は！

盗賊の歌

リョベートが編曲した十数曲のカタルーニヤ民謡のうちで、もっとも美しい旋律をもつものとして知られる。恋の盗賊がうたう「ひかれ者の小唄」である。

おいらがガキだったころ

粹をきどつてうぬぼれて

首には派手なスカーフまいて

さんざだました娘つこを

それがいまでは囚われの身さ

お仕置きうけずにやすむまいて

さらば、紫のナデシコよ

さらば、夜明けの明星よ

カニゴの山

カタルーニヤの人びとが、ふるさとの山に

よせる望郷の歌。編曲者はナルシソ・イエベス。かれは東南スペイン、ムルシア地方の出身だが、ひろい意味でのカタルーニヤ楽派にふくまれる。

イサーク・アルベニス

「カタルーニヤ繪巻曲」

一八六〇年に生まれて、グラナードスとともにスペイン近代音楽の祖とされている。アンドルシアにつよい興味をもちつづけた。これが故郷のカタルーニヤ民謡をつかっただけの作品である。もとはピアノ曲。

リュイス・リヤック「樺杭」

アンブリアス生まれのシンガー・ソング・ライター。一九六七年、カタルーニヤの「新しい歌」運動のバイオニアともいうべきグループ「七人の審問官たち」に参加し、カタルーニヤのみならず、スペイン内外で個性的な歌い手として知られるようになった。

一九六九年、バルセロナのカタルーニヤ音楽堂でソロ歌手としてデビュー、キューバへもいった。だが歌詞の内容が先鋭すぎると

いう理由で活動に制限がくわえられ、四年ものあいだ、バルセロナで歌うことを禁じられた。その間はパリへいくことがおおく、オランピア劇場でなんどかりサイタルをひらいている。

「樺杭」（楽譜を別掲）は、リヤックといえど、あれといわれるほどの、かれの代表作である。

リュイス・リヤック「七四年四月」

官憲にたいして抗議する声は、リヤックの歌のなかですますつよまつていった。スペインにおけるかれの人氣も、活動制限にもかかわらず、どんどんたかくなつた。

一九七五年三月、かれはふたたびバルセロナでうたつた。歌詞が不穏当。そして八か月間、スペイン国内でのいっさいの音楽活動を厳禁された。「ポルトガルの四月」への共感をうたつた「七四年四月」も、このときに演奏された。

同志よ、もし君たちに

白い月がどこで眠るのか、わかつたなら
おしえてくれ、ぼくは月が好きだから

でもぼくは月を愛そうと近づいてはならぬ
なぜなら、まだたかいかがあるから

同志よ、もし君たちが彼方、海のさなかの
人魚の歌を知っているなら

ぼくも近くまでさがしにいこう
だが、まだたかいかがある

そしてもしも悲しい運命がぼくをとらえ

ぼくが地に倒れたなら

ぼくの歌ぜんぶをひろって

赤い花の一束とともに

ぼくが深く愛した者に届けてくれ

ぼくたちがたたかいに勝つたそのとき

同志よ、もし君たちが自由の春を望むなら
君たちといっしょに、ぼくもいっ
なぜなら、その春を生きるために
このぼくも兵士になるのだから

そしてもしも悲しい運命がぼくをとらえ

ぼくが地に倒れたなら

ぼくの歌ぜんぶをひろって

赤い花の一束とともに
ぼくが深く愛した者に届けてくれ

エルス・セガドールス

ゆっくり

カタルーニヤよ、たのしみは、わたしの、花の、うた、を、歌、う、た、い、ま、は、あ、ま、り、と、れ、だ、い、ち、ま、ま、も、つ、て、あ、り、と、れ、

た、ち、の、こ、ろ、に、あ、ら、ま、い、な、い、

エルス・セガドールス (刈り入れ人たち)

- 1 カタルーニヤよ起て
みりの日きたり
おごりたかぶる
ものたちはしりぞく
刈りとれ
- 2 刈り入れびとよ
六月は近い
しごとにそなえ
得物といでおけ
刈りとれ……
- 3 敵よおののけ
われらの旗の前に
麦の穂みのり
この鎖たつとき
刈りとれ……

ぼくたちがたたかいて勝ったそのとき

エンリケ・グラナードス
「なげき、またはマハと夜うぐいす」

グラナードスは一八六七年、カタルーニヤのレリダ市で生まれた。近代スペインの民族楽派の興隆をになった作曲家であることは、すでになんとかふれた。

月光のさす窓辺で思いにしむマハのすがた。彼女をなぐさめようと、夜うぐいすがしげみのなかで鳴く。この「なげき、またはマハと夜うぐいす」は、一九一一年、ピアノ組曲「ゴイエスカス(ゴヤ風の場面集)」中の一曲としてつくられ、のちにこの組曲がオペラにつくりかえられてからは、アリアとして有名になった。カタルーニヤ民謡を下じきしている。

このオペラ版「ゴイエスカス」初演にたちあうため、グラナードスは第一次世界大戦中の一九一六年、ニューヨークに渡った。その帰路、かれの乗ったイギリス船がドイツ潜航艇の無差別攻撃にあい、グラナードスは妻とともに大西洋の波間に沈んだ。

サンタ・エスピーナ(聖なるトゲ)

サルダリーナは、交互に手をつくんだ男女が円い輪をつくり、顔とからだをつねに円の中心にむけて、横へステップしていく踊りである。大小の祭りやたのしみのために、カタルーニヤの人びとは普段着のまま、いままサルダリーナを踊りつづけている。

かんたんな楽器でこのサルダリーナのしらべを演奏する楽団をコブラという。サルダリーナのための音楽は、カタルーニヤ民謡の特色を反映して、どれも抒情的で品がいい、したしみやすい旋律をもっている。この「聖なるトゲ」もそのひとつである。

いまま将来もわれらはカタルーニヤ人
そう望もうと、あるいは望むまいと
なぜならこの地上、太陽のマントの下で
ここに誇り高い土地はない

神さまが春、ここをそぞろ歩いた
ひと足ごとに歌っていった
それもこの土地のすみずみまで
歌って、歌いぬいたのだ

小鳥が歌う、河も木も
月も太陽も歌っている
女たちもしじゅう歌う、働きながら
それともゆりかごのかたわらで
そして、土のなかでは
過ぎ去った者たちもみな歌う
昼も夜も、山から山へ
モンセラートもみんなに合わせて歌う
わが子よ、カタルーニヤのために
つよく丈夫にそだってほしい
この地を踏みじめる者に立ちむかえ
郷土のために生き、そして死ぬのだ

棒 杭

リュイス・リヤック

Allegro d. = 48 (♩ = 144)

ガウデイーの依頼主

北川フラム

働き、食べていかなくは生きていけない。そこから仕事の方法と、表現の目的ができていく。

ガウデイー三十一歳の一八八三年、彼はサグラダ・ファミリア聖堂建設の主任建築家に任命された。このことが、後になって彼の生涯の軌跡をかたどる主軸になる。

ささいな契機が、生涯の活動を導く。しばしば事大的に語られる運命も、その契機が生まれるための、人間の決断、出会いの必然によって編まれている。ホセー・マリーア・ボカベリヤ・イ・ベルダゲールという町の書店主になる祈願、すなわち聖家族教会の設立という発意と、その設計を引き受ける時のガウデイーの決意が、サグラダ・ファミリア聖堂の空間と、そこにまつわり張られている伝説と記憶の総量の源になっている。一介の書店主の祈願になる教会設立という夢がもつ現実の諸条件とのギャップが、ガウデイーと名づけるしかない、ある共同性となって私たちに感じられるのではないか。

ガウデイーはモダンな、優秀な建築家であった。青年ガウデイーにとってのアイデンティティーは、近代産業の発達とその無限の発展の予感に裏うちされた建築家の誇りと、カタルーニヤ人としての立場という二面で理解できる。ここでは私性のことは問わない。私にはわからないことだから。

ガウデイー誕生の一年前、一八五一年、ロンドンで世界初の世界万国博覧会が開かれているし、パリの万国博覧会も五年のことだ。五七年に経済恐慌が起つていて、資本主義の矛盾もあらわれているが、建築家ガウデイーにとって、建築設計の可能性は明るいものだった。彼は学生時代から実地での仕事に手を染めている。二十五歳までの経歴からうかがうことのできるガウデイーは、きわめて優秀で将来を期待された意欲的な建築家であった。

一八七八年の記録に、カタルーニヤ探訪協会に参加し、同協会企画によるカタルーニヤの諸地方探訪旅行に加わるとある。この協会にはカタルーニヤ主義者のグループであったらしい。今も依然として根強くあり、市民戦争の際には、フランコ軍との戦いのなかで人民

戦線派の抵抗の拠点ともなつたバルセローナを軸にしたガタルーニヤ地域主義は、十世紀のあたりから、社会的思想的に独自の骨格をもちはじめたのである。歴史的にも、自然、風土、言語をはじめとした文化的にも、ガタルーニヤは国民国家とは違った意味での歴史的主体であり、カタルーニヤ独立構想は、マドリッドを中心としたスペイン国家とは長い格闘を続けていたのである。ガウデイー二十八歳（一八八〇年）の時、バルセローナで第一回「カタルーニヤ主義者会議」が開催されていて、カタルーニヤ地方主義の昂揚は熱度を加えていた。その晩年、カタラン語を使用して検挙されたガウデイーもまた、カタルーニヤ主義者としての相貌をもつていたのである。

建築家としての、カタルーニヤ主義者としてのガウデイーの相は、幅奏しながら、充実した健康的な展開をみせる。勃興するブルジョアジー、エウセビオ・グエル・バシガルビとの交遊、その庇護、彼が施主となつた建物の設計は、そのしあわせな記録である。グエルは、キューバで富を築いた父の後を継いだ人で、繊維業を営んでいた。彼は資本家と労働者の共栄という、初期社会主義的なユートピアを信じ、そのための実際の計画が、医療、スポーツ、学芸にわたる総合的なコロニーとして、サンタ・コロマ・デ・セルベリヨ村の三十ヘクタールという広大な土地で進められた。ガウデイーとグエルの計画で、織物工場の周囲に、二階建の労働者住宅が建てられた。その他には、厚生施設、図書館、スポーツ・クラブ等、労働者コロニーにとって必要な施設があつた。このなかに、中断された教会があり、その一部がコロニア・グエル地下聖堂として残つて

いる。

ガウデイーの建築には主として二系統の依頼主がいる。ひとつはグエルに代表されるブルジョアジーたちだ。化粧タイル工場経営者マヌエル・イ・ビセンス・イ・モンタネールの依頼、カーサ・ピセンス（一八八三→一八八八）。キューバで財をなしたマキシモ・ディアス・デ・キハーンの依頼の別荘、エル・カプリチヨ（一八八三→一八八五）。金融業フェルナンデス・アンドレーヌ商会の依頼によるカーサ・ボデイーネス（一八九一→一九三三）。繊維業者ペドロ・マルティル・カルベットの息子たちの依頼で、カーサ・カルベット（一八九八→一九〇〇）。バルセローナ財界の要人、ペドロ・ミラー・イ・カンブスの依頼による、カーサ・ミラー（一九〇六→一〇）。

これに対して、宗教人からの依頼がある。同郷人である、アストルガ司教ホアン・バウティスタ・グラウ・バリエスピノスの依頼による、アストルガ司教館（一八八七→一九三三）。グラウ司教の紹介による、エンリケ・アントニオ・デオ・オソ・セルベリヨ神父の依頼による修道女寄宿舎、テレサ学院（一八八八→一九〇〇）。同じくマリア・サゲリス・モスリン未亡人の依頼による個人住宅、ペリエス・グアルド（一九〇九→一六）。

これら二系統の施主は、図式化すれば、産業の発展を代表し、建築家ガウデイーの願望にみあつた流れと、カタルーニヤ地域主義によって成立する教会と言えるだろう。ガウデイーにとって、建築家という職業は、建築のもつ射程と面白さ、エリートとしての野心を含めて、カタルーニヤ人としてのアイデンティティーのある、調和した理想的なものであつたに違いない。労働者コロニーに付属する、

コロニア・グエルの聖堂の計画こそ、彼の全体重をかけるに値する夢の一里塚であつた。散弾を入れた袋を吊るした立体的な構造模型に、ガウデイーの喜びをみることが出来る。

建物の施工期間を記したのは理由がある。設計依頼の最後が一九〇五年のカーサ・ミラーであることに注意したい。この年、ガウデイーは五十三歳である。一九二六年、七十四歳で亡くなるまで新しい建物の設計に入っていない。これでは建築家は食べにくいことができない。ガウデイーはそれまで関わっていたサグラダ・ファミリア教会の建築だけに専念するのである。喜捨をおおぎ、ほそぼそと生きる。実験し、模型をつくり、壊された建物の石材を使いながら、数人の職人たちと石を積みあげる。この繰り返しだが、空白の二十一年間に費されている。

ガウデイーの生存の期間、一九〇〇年以降のカタルーニヤの社会年表に書きこまれるのは、産業の没落、経済恐慌と、カタルーニヤ分権派の中央政府に対する反乱である。爆弾テロ、アナキストの銃殺、米西戦争の敗北、ゼネスト、「カタルーニヤの声」に対する軍隊の襲撃、鉱山労働者のストライキと軍の出兵、労働組合運動の拡大、モロッコ戦争に対する民衆の不满、第一次世界大戦、株式市場の閉鎖、カタルーニヤ語の公用語請求拒否、反政府の国会議員の反抗、バルセローナでゼネスト、全国労働連盟のデモと工場の麻痺とこれに対する経営者同盟のロックアウト。

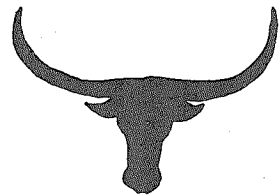
ガウデイーの理想がごとく崩れていくのである。カタルーニヤの教会は、激化する闘争のなかで体制化する。経営者と労働者の理想の関係はすでない。天職としての建築設計は危機におちいる。

設計家にとってのアイデンティティーはどこにもない。ブルジョアジーの没落と教会の墮落は、経済的にも、さらにそれ以上に思想的にガウデイーをうちめす。

この時の苦悩のなかにも、彼にはサグラダ・ファミリア聖堂に携わっているという事柄があつた。それはブルジョアジーの依頼でもないし、教会の依頼でもない。みずからが働き、喜捨をうけて積みあげていくしかないという要件であつた。

ガウデイーの仕事の仕方、職人との共働、デザインと実験と建築とのたえまない往還。それらは、彼と、その仕事を包む条件のなかで考察され鍛えられていったものだ。共観福音書の世界への没入と、原始キリスト教への関心、土俗的な地中海世界と、そこに生きる民衆たちからの学習も、青年ガウデイーの理念の崩壊のあとに残った条件のなかから、ふたたび生活を組織するなから育まれていったものだ。

一介の書店主の発心による教会の設計に加わるといったことが、今、私たちからみえるガウデイーを規定したとすれば、ガウデイーが、その依頼を受けた時か、あるいは参加を申し出た時の決意、あるいはささやかな友意にこそ、すべての関係性が凝縮されていたと考えられる。一人の人間の初心に感応する、一人の人間の初心。それは錯綜する現実のなかで人間を鍛えるひとつの契機だと思える。



水牛楽団のページ

活動記録

四月二十四日(金) 水牛ミュージック・コンサート第一回「ワルシャワ物語」 中野文化センター

会場は超満員の熱気で湧き返っていた。今日のポーランドの情勢に関心を持たれている人々や、豊富な内容に注目された方々も多かったのではないだろうか。今までの水牛楽団の活動の幅をふくらませた初めてのこのころみのスタートに、多くの人々の御参加を頂けたことを深く感謝します。

当日のおたのしみだった林光コーナーでは、ルトスワフスキの「鉄の行進」と「ポーランド式料理のつくりかた」が披露され、喝采を浴びた。

四月二十七日(月) 同 長野県勤労者福祉センター

はじめての水牛楽団長野公演とあって、客の入りが心配されたが、まったく無名のわりには上々の入り、主催者の苦勞が偲ばれる。終つてすぐに次回「カタルーニヤ讃歌」の打ち合せを、といわれて全員ビックリ。

四月三十日(木) 同 京都教育文化センター

大阪、名古屋から聴きにみえた方もあつたが、出足は低く残念。

京都に定着できるかたちを考えたい。どんなにか力添えを。ともあれ、長野、京都と新しく水牛を支えてくれる仲間を得たことを大事にしていきたい。

五月九日(土) 韓国民衆の闘いに心を寄せ光州を忘れない劇と音楽とバザーの集い
金大中氏らを殺すな！首都圏緊急運動 南部労政会館
・朴正熙を歌った「その時その人」を、全斗煥に内容を替えて歌つたが、今ひとつであつた。

た。ほかに金大中、金芝河の歌、タイの歌。チリの「不屈の民」「ワルシャワ労働歌」では会場からも歌声が聞かれた。

予定

五月三十日(土) 淑徳大学新入生歓迎音楽フェスティバル 学生自治会新・歓実行委員会 0472-63-9985 千葉教育会館 10時

六月七日(日) 安保をつぶせノアジアの民衆とともに侵略と戦争を許さない6月行動 同実行委員会 03-815-1648 日比谷野外音楽堂 1時

八月二十七日(木) 水牛ミュージック・コンサート第三回「サンチャゴに歌が降る」 中野文化センター 7時 前売一五〇〇円 当日一八〇〇円

民衆カンタータ「サンタ・マリア・デ・イキーケ」をはじめ、チリの「新しい歌」(ヌエバ・カンシオン)運動のなかから生まれた歌などを中心に。お楽しみには、林光、高橋悠治の新作発表なども予定しています。

境川私記 (二)

三月下旬の干拓地は雨の日が多く、春を思わすものは咲き始めた菜の花ぐらいで、暗い寒い日が続いた。古い堤防の土手におい茂っていた葎や笹などは、県当局の手によって全て刈り取られ、焼き払われてしまい、団結小屋を包んでいた風景もなくなり、まるで広大なグラウンドの中にぼつんと、櫓と小屋が取り残された異様さで、藪を失った雉子が住家を探して、コンクリートの堤防上を歩いているのと同じで、寝起きする生活場としてはつらく落ちつきのないものになった。

反対同盟三名の農地と、団結小屋、櫓に対する強制代執行の期日が三月二十五日から四月十四日までとの通告。いつ来るかわからない、まったく焦点のしぼりにくい苛立たしさに冷たい雨が追い打ちをかける。

県当局が権力者の持つ全ての暴力装置を使って農地を取りつぶそうとする時、立ち向って構えねばならないことの当然さの中から、準備が、支援の仲間の協力でふくらみながら進んで行く。

堀田博之

堤防で囲まれた地理的条件から、どうしても「袋の中のねずみ」闘争にならざるをえない。「袋の中のねずみ」でもなんとか勝たねばならない。

反対同盟会長の渡辺さんは「農民は土に生き、土に死ぬ、農地は断固として死守する」と語られた。「土に死ぬ」とはどういうことなのか、その言葉がいつまでも私の中に残る。

十二月の雨の日玉葱を渡辺さん夫婦と三人で植付け、こごえて硬直する指先に、いつまでも畑地であり、生き付いてくれることを祈った。

二月中旬の季節はずれとも思える暖かい日、渡辺さん一家は春を呼ぶ土の香りに引きつけられるのだろうか、畝を作ってジャガイモの植付けである。畝先にふれる土は、今植えてくれといっている命脈が伝って来る。作業中、育穂さん、かすみさんと次男の照雄さんとの間に議論がはじまった。「植付けても強制代執行で、取られるのではなんにもならん」「その時は種代だけ損だと思っしかない」



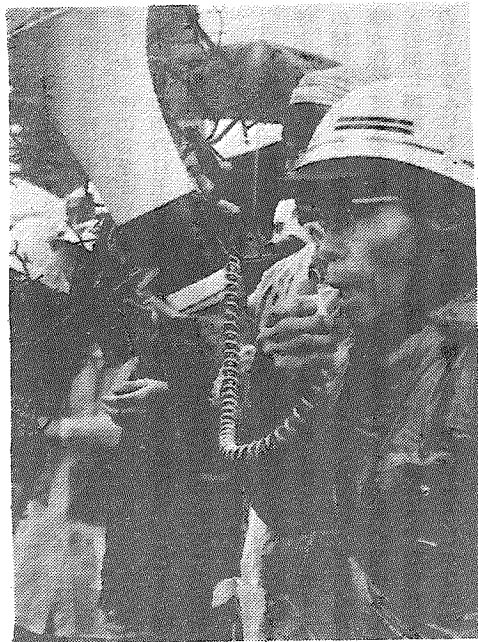
「そんなことを言っていたのでは、何もできんではないか」そのうち全部植付けてしまい、団結小屋で茶をのみながらの雑談も、割り切れない気持でニガ笑いする。土の音が聴こえても、答えきれないもどかしさが土に生きようとしながらの悩みである。

土と共に生きる百姓も、土と共に死ねぬのではないだろうか。土が殺される、その死んだ土を見ながら生きねばならぬ。土に死ぬ土を奪い取られては死ぬこともできない。農地を断固死守するという決意は、そういうことの上に重なり合っていると思うし、どのような勝ちかたをするのか、どのような負けかたをするのか暗中模索である。

恒例の年末餅搗大会で、みんなにおいしいアンコ餅を食わしてやろうという渡辺さん一家の心遣いは、そのために育てた砂糖キビ刈りからはじまり、バケツ二杯の搾り汁をハンソリで煮詰め、石灰乳を入れて二升ぐらいの黒砂糖液ができればいい。渡辺さん夫婦と照さん、支援の三人、手まわしの搾り機がこわれるトラブルもあって、中日おいての楽しい作業であった。

大の大人が六人掛りで、きまじめに造った黒砂糖液が二升、食品店で買うと、どれ程という計算などは、この場ではない。みんなが「おいしい」と言ってくれるのがうれしただけである。心のよび合う関係の中に時の過ぎるのも自分たちのものと感じられる。

小屋のむこうの農道の先では、同じ干拓地でも、まったく異なる風景がある。県当局の手練手管によって、代替地として水田をもらい、水田では収益があがらぬため、畑地にしてくれと要求したものの、代執行が近づき、自分で畑地にするため、売り渡してしまった



畑の砂を軽トラに積み、必死で運んでいる一家の姿である。「反対同盟をぬけて、欲に走って、つまらんことをよくやっとなるわ」「むこうから見れば、こっちのことを、いつまでも反対運動をやって銭にもならんつまらんことをやっているように見えるだろうが」と笑いとはばすことのできるのも十年間の反公害闘争の苦液がしのべる。

三月二十四日、雨中干拓地進入路の東西に頑丈なバリケードが築かれ古タイヤがトラック十五台分運ばれた。バリケードの正面に高札が立ち、古く重い稲こぎ千歯もふくり付けられ、路上にゴロゴロと大きな石が置かれ、斬壕も掘られ一応の準備もとのつた。多くの人たちが雨をたいて結集したのだが、県は出て来なかった。出鼻をくじかれての腹立たしさがつのる。「来てくれとたのむわけのものでもないし」それからの毎日は、今日か翌日かと思いがながらも、食っては寝、寝ては食いの毎日であった。

病気ががりの村松弘平（63歳）と、無我利道場に子供たちを残し村松さんの看病にみえた中江女史が来てくれ、実践から生れたユーモアのきいた村松節が雨がちな毎日を救ってくれた。二人のおかげで、ほとんど食事のことに気をつかうこともなくなった。牢名主と私に渾名をつけた彼は鍋奉行そのものである。辛辣ながらもユーモアのきいた語り、人の良い心遣いは、戦いの中で出会った忘れられない人である。

焚物が濡れて困った時もあったが囲炉裏の火のたえたことはない。夜の明りは、ロソク、毎夜のごとく歌と話に花が咲く。

この小屋には、人の心を解きほぐす、何かしらぬが魔力のようなものがあるようだ。それは、近代文明生活から見れば桁はずれなところが、心を引きつけるのかもしれない。それは時たまの遊びにしかすぎず、帰って行く所は多消費の近代社会である。近代が人間をおしつぶす、その町へ帰って生活することの気安さが一方であるかぎり、そのところを痛みもせず、また、自からも変えることもできずして、つぎの時代は見えてはこないのではないだろうか。

四月一日夜八時県道より干拓地への道は機動隊によって全て封鎖された。緊急連絡によって、反対同盟、支援の仲間、雨の降る暗い農道を通って団結小屋に集まり、やり残しの作業を終え早朝三時に再結集ときめ、雨下でなんとか小休止する。

五時半頃、雨天の中にも霞む先がだんだんと白み、カッパの帽子の替りに、つるの付いた鉄鍋をかぶったそとみには滑稽な私の姿に

笑う人もないほど、寒さと緊張の朝が ажける。

七時、県土木部職員九十八名、民間作業員八十名、中部管区機動隊四百四十名、大型ブルドーザー、ユンボ、放水車等、東側バリケード前に代執行宣言の横断幕を先頭に到着。櫓の上のドラム缶と鉄板の連打、抗議のシユプレヒコールがとぶ。二つのバリケードが放水車と機動隊によって取り払われ、東西六カ所に積み上げられた古タイヤに火が放たれた。真赤な炎は地をはい、黒煙は天を覆いつくす。百姓の怨念がなお激しく雨を降らす。

八時半、ブルドーザーを先頭にキャタピラの金属音を響かせながら干拓地内に突入、団結小屋に迫る。八時五十分強制代執行開始宣言。渡辺会長は、これまで共に闘ってきた同志に礼を述べ、今日の代執行反対闘争を新たな出発点とすると涙ながらに決意表明をする。黒煙でくすんだ顔、ずぶ濡れのひきつった顔の仲間たちから割れんばかりの拍手がわく。

囲炉裏の火に水をかけ畳で蓋をして足場をよくし自在釣も取りはずす。出入口に四、五枚の畳を立てかけて塞ぐ。二重に敷きつめた畳が今役立つ。内に立てこもる者、九十九人。「境川 清流永久に願ひつつ むべ山風に 花のちるらん」渡辺会長の短歌、三里塚農民から送られた赤旗の機文が、いつのまにか雨のあがった陽差に室内に映える。抗議のシユプレヒコールが、かや葺の小屋を矢になつて突き飛ばす。入口の庇がこわされ、正面の柱にワイヤが掛けられブルドーザーでもぎ取られた。その隙間から、機動隊や作業員にニギリめし、塩、玉子、マヨネーズや油、ミン、酢、パンクズ等を混ぜ合わされたものが投げかけられる。入口の畳を取り除こうとする機

動隊の頭から味噌汁をみまう。正体不明のものが飛び出すので、後退せざるをえない。櫓はすでに半分以上こわされた。息子の指が一本一本もぎ取られていく思いで顔を掌にうめて、うずくまる。こわされていく一つ一つに仲間との血の通いあったものがある。

午後二時過ぎ、小屋の内外の全員が菜の花や野菜などを手にしたまま排除された。「こわされるよりも、自から火をつけたら」と言う話が以前に出たこともあるが、造った時のまったく逆な手順で、こわされていくのを堤防上で見た時は、言葉にならぬ嗚咽が体をふるわせた。

菜の花をたむけ飾られた小屋や櫓、反対同盟の渡辺さん、小林さん、宮田さんが今日までめでた土が、ブルドーザーのキャタピラの金属音の響きとともにふみつぶされていく。土が殺されている。土が死ぬ、今、眼の前で。

権力の物量の前に完全に負けた。すきとおった黄色の菜の花で装った団結小屋、櫓の上に飾られた小花の香りは、ふみにじられ、けとばされ、早春の空に、土の中に消え去った。

みごとな負けつぶりだった。それだけに仲間の顔は案外と明るい。物量には負けたけれど、心の中に、次の闘いへ向けての力が貯えられていく。反対同盟から支援者への伝言「みなさん、ありがどう。とても楽しい闘いでした、また、ガンバリましょう」

今、五月、現地では、次の闘いへ向けて、代執行で取られた材料を持って来て、再び櫓が建てられ、人々の団結が作り直されようとしている。

流れ去った悲哀(四)

—過ぎし時代の歌謡

半月

一、青い空 銀河水 白い丸木舟
月桂樹に 兎一匹
帆もかけず 權もなく
よくぞ 行けるよ 西のくにへ

二、銀河水を越え 雲のくにへ
雲の橋 渡つたら 何処へ行く
遠くで キラキラ輝くは
暁の明星のみちしるべ 道たどり

高^コ銀^{ウン}

金慶植^{キムギョンスク} 訳

一、푸른하늘 은하수 하얀 쪽배엔
계수나무 한나무 토끼 한마리
돛대도 아니달고 샅대도 없이
가기도 잘도 잔잔다 서쪽나라로

二、은하수를 건너서 두름 나라로
구름다리 지나선 어디로 가나
멀리서 반짝반짝 비추이는 전
셋별 등대란다 길을 찾아서

歌は残っている。歌は魂であるがゆえに残っているのだ。その魂に身も心もそしてこの民族の根本詩情を受けて、それらがつくり出した歴史の一角から再びうたわれる。突然歌はその姿を消す。その歌

がうたわれなくても良い幸福のためである。

しかし、そのような幸福と忘却が湮滅するとき、または歌は人間各自がおりなす共同の総和として甦える。歌はこのようにして伝承される。そして歌のない民族はないという真理が実現される。

「韓国人たちは非常に音楽を好み、子供たちはいつも道でうたっている。夏の夕方ともなると、子供たちは集まって合唱する」と、H・B・ハルバートは彼の「大韓帝国史序説」でいっている。

このような韓末の子供たちを観察した十九世紀の米国の若い知識人の愛とともに、この国の子供たちは歌を愛した。その子供たちが大きくなって、失われし時代の植民地主体を歌で処断したのである。歌は民族が踏みじられたとき民族になる。歌は愛人が去ったとき永遠なる愛人になる。だから愛は魂である。

また、いくら歌が魂だといっても、その歌がうたわれる社会の性感帯の必然と出会わなければすぐ効を失う。いうなれば歌はその時代の真実と希望の心からなるものから受け入れられるとき、はじめて方々で魂の絶景としてうたわれるのである。

歌は歌以上である。「青い空 銀河水 白い丸木舟は……」が、一九二〇年代の暗黒の硬質から抜け出して、この国の少年と少女、多くの憂愁の世代にきこえはじめたとき、その歌は歌以上の郷愁がつくり出す童貞として、民族を慰め民族の魂であるといわれるようになった。

一九二〇年代の韓国は、奪われた国を探し求める抵抗と、現代社会の形成という重い荷を担う。韓末の保守グループは、義兵の亡命または国内の抵抗を、開化グループはそのような主体運動に相応する

月」がはじめてうたわれた。

そのときまで、この国の子供たちには「山谷に流れる清い水よ……」のようなもの、「学徒歌」のようなもの、そして方定煥の翻案曲「日暮れどきの空の星三兄弟」があっただけである。韓末の漢趣もはなはだしい唱歌、歌詞とメロディ以前の曲調の歌は、すでにそのときは古いものであり、何の説得力もなかった。そこでこの国の童心と情緒、そして新しい自我がこめられている彼の「半月」は、永久的な歌という使命を帯びてつくられたものであった。

「半月」はかならずしも童謡とはいえない。なぜなら歌をうたう人は、植民地時代のすべての世代を網羅していたからである。その当時の退廃的な日本の女給までが乾杯の歌としてうたったのである。

この国民の歌曲の縁起説は次のようである。一九二三年九月九日の早朝、二十一歳の尹克栄は日本から帰ってきたとき、上姉尹貞順の死を哀悼しているうちに、ふっと三清公園のいまにも崩れ落ちそうな水壘と夜明けの空を眺めたとき、ほとんど、靈感にちかい即興の曲が浮かんだ。それを譜にしたあと作詞した。夜明けの月は、そのような歌を作らせたあと沈んでいった。彼の姉コンプレックスの悲は、そのままより大きいこの国の哀調を帯び、青い空の魂として、この国の清らかな声で天へと広がっていった。

それが日本NBC放送ネットワークに、合唱で独唱でと、そして韓半島から日本、満州での版權を獲ら得た。作詞作曲した人が得たのは韓国音楽史でもほとんどまれなことである。

尹克栄はこの歌を作る前の一九二三年五月一日、東京留學生方定煥、曹在浩、秦長燮、鄭寅燮、李軒求、孫晋泰、馬海松、鄭淳哲た

啓蒙をこととした。千寛宇のいうとおり、保守だろうが開化だろうが、いずれもこの国の宝であった。だから、義兵の民族大義も、開化と団結し得ず、開化派の良識もかならずしも植民地的思考に傾いていたのではなかった。

このような時代の苦悩の復しゅうにもかかわらず、この国のものとも切実な目的は国を取り戻すこと、民族を愛することとしての権利と一致した。その反対は侵略者日本ミリタリズムの総督政治であった。

一九二〇年代の放浪の芸術家尹克栄は、こういう時代の名もない義務として、だがもつとも重要な義務として、彼の作詩作曲の「半月」をこの地に聞かせてくれたのである。

彼は一九二四年東京の「セクトン会」生活から帰って来た。ここまでも彼の浪漫主義の風雲はたいしたものだった。曹在浩たちと京城高普（中学校）、京城晋成専門学校を中退して父の意志に反して音楽を志す。そして東洋音楽、東京音楽学校選科に入学する。そこで朝鮮人虐殺の関東大震災にあう。そしてやっと生きのびて故国へと帰って来る。彼が再び日本に行こうとするとき父母は彼をひきとめ、そのかわり京城府昭格洞四二番地の彼の家の広い庭に音楽会館を建ててやる。これが「ダリア会館」である。

一九二四年の秋に、尹克栄自営の「ダリア会」が結成され、この国最初の少女合唱団が生れた。そして幼い尹亨模、尹貞石兄弟と趙錦子、尹寅燮、安貞玉、全容燮、そして彼の愛人となって閔島の龍井、ハルビンへいっしょに逃亡した妻の呉仁卿など十六名の少女が団員となった。そこで彼の作詩作曲の童謡「正月」と「半

プレゼンテ! 第2号 4月 1981年

特集=チリ

- ※ チリにおける女性政治犯への迫害
— 国連報告より —
- ※ 翻訳論文 ファシズムは女性をどのように利用したか—チリの場合—ミシェル・マトラル
- ※ ピノチェト来日反対集会報告
- ※ 来日したCUTへのインタビュー
- ※ 各国レポート(今、最も熱い国の女性闘争)
- ※ ニカアグア・エル・サルバドル・グアテマラ
- ※ ラテンアメリカ女性とコペンハーゲン会議
- ※ 漫画・マファルダ
- 小さなフェミニスタ・マファルダの活躍 —
- ※ フェミニスト・フォッパ女史の政治的失踪

★定価 500円/千200円

タシエール ドミティラ
Taller - Domitila

連絡先 〒186 国立市富士見台1-28-1-27-502 山崎方
TEL-0425-75-8377



ちと、少年民族運動の団体「セクトン会」を結成した。自分たちの文字と歌で、国を探し求めようとする児童運動であった。「セクトン会」が結成された五月一日を、彼らは故国の開闢社の主幹全起田に「子供の日」と決めるようにさせ、天道教、仏教、基督教団体の力を借りて子供の日の行事を行なった。一種の子供の三・一運動であった。セクトン会というセクトンチヨゴリの名は尹が、マークは太極旗の太極からひよこが出てくる模様で曹在浩のデザインが成功した。それが日本の官憲の目にとまり、名前を変えるありさまであった。

彼は自分の家においてあるダリア会で、愛人仁卿を連れて、六歳のとき婚約し、十六歳で結婚した本妻を捨て愛情逃避の冒険に出る。龍井(間島省)で隠れていたあとハルピンに行き、そこで白系露人の女性を含む十五人の男女でなる「白虹楽団」をつくる。そこで彼の作詞作曲の「半月」をはじめ多くの歌を移住者に聞かせているうちに破産する。

再び日本に舞いもどって日比谷公園での冬の露宿を皮切りに、彼の黄金期東京時代を迎える。「モダン日本」の社長馬海松の後援でムーランルージュ文芸部での活動と独立ステージを得て、日本の女優たちに韓服を着せて「豆満江の歌」「半月」「アリラン」を舞わせ、彼自身が歌をうたうこともあった。

このような風雲の軌跡をおりながら、彼の歌「半月」は、一九二〇年代をすぎた植民地全時代にひろがっていった。「半月」は典型的な童謡歌詞である。しかしその曲に載ったとき、その清澄な旋律の昇天性と処女性の完璧によって、人びとに新鮮な祝福の魂を呼

びおこさせた。清潔で冷涼とした半月が沈みかけ、暁の星と出会うまでの夜の深さが、歌の曲のそれと合致する理想こそが、この歌が時代と状況の多くの曲折にもかかわらず、それを超越することができた秘密である。

このような歌が、一九二〇年代のこの地でうたわれたということは驚嘆に値する。その時代は十九世紀と一九一〇年代の新時代の特徴である、近代と土着の葛藤がある程度消長されたあと、この国のもっとも重要な文化的同人意識が知識人社会に根をおろしたときである。

その根が一九三〇年代の自生文化の満開の時代を生む徴候を受け持つ時代に、子供の父方定煥、子供の母尹克栄が、彼らの少年民族主義の情熱によって、すでにこの国のもっとも優秀な歌曲をつくらることができたということは特記されるべきことである。

そして日帝末期、ちよつとの間だけ日本の断末魔的予科練の軍歌に押されていたが、解放以来、この国の人であれば誰でもがうたったことのある歌として伝わって来る。そして尹克栄はこの歌を担保に銀行から金も借りられたが、この国の人たちは、この歌で生の一部分を得ることもできた。

編集部注・「半月」の楽譜は次号に掲載します。

金芝河氏の出獄所感

「漢陽」81年3・4月号所収

李銀子 訳

この記録は、ヨーロッパ地域の金芝河委員会の委員であり、女流作家でありまた映画制作者でもある Marieta Casquiere-Pain 女史が去る一月末に、金芝河氏に関する映画撮影のために原州に赴いたとき、金芝河氏の自宅におこなった会見記録であり、西独において発行されている「民主韓国」誌に掲載されたものを転載したものである。

I

わたしは監獄がこれで四度目になります。六〇年代韓日会谈反対のとき一度投獄され、その後の五賊事件、そのときは民青学連事件、そのつきがこのたびの反共法違反事件による投獄と四度目になるのですが、おそらくこのたびの六年間というのは二重三重の禁錮、監禁状態にあったと言えます。パピヨン、そうパピヨンのような状態

にあったのですが、毎日くらすなくてはならない日常的な生活空間がせめられるということ、絶え間なく監視されているということ、そして監房のなかでの灰色の雰囲気、また過去に対する限らない自責、たとえば孤独であったり、捕えられている人間の、霊的に捕えられている人間のなかに、常におこってくる自閉症、すなわちオートイズム、または自分自身に対する幻滅のようなものが、典型的にわたしにあらわれ、また肉体的な活動空間のなかにせめられたばかりでなく、しだいに歳月が流れていくので、精神的にもせめられ、まるでどんなに祈禱しても、ある場合には毒蛇のような憎悪感、つまり、こんなもので自分自身の人間性を維持しようとするそのような衝動、くどいほど持続的な、とんでもない衝動にかられたことを思い出します。

わたしがこのような問題によってカトリック教会の当局や公式的な教理からもし問われたとしても、これはわたしの経験であるので

はつきりと申し上げることができるのは、「ロザリオ」や公式的なお祈りやルーティン化（Routine）されたような信心行為では、どうして克服することなどできなかった、ということですが、もちろんそれは、わたし自身に欠陥があるのでしょうか、わたしたち一般的な与えられるような信心行為の様式ではどうしていえることができなかつたこと、言いかえるならば、一般的な教理に対する同意、アーメンをもってしてはこの場合、わたしの人間性を喪失せずに、充分に温和で、その憎悪を克服し、そのようななかにおいても微笑と愛と平和のなかでくらすのはとてもたいへんだつたことをわたしは告白したい。

それで、絶え間なく悩んだすえに根本的なものに対する旅行を、監獄の外ではなく、そのせまい監房のなかであろうと、根本的なものに対する間を果敢に提起することによってはじめて、そのなかでわたしが人間として生きのこれるのだと悟りました。それまではいろいろの問題が多かつたのですが、それからわたしがはじめたのが参禅でありましたし、または異教にそまるといふことでなにか問題があるかもしれないが、東学の呪文もとなえてみましたし、それをカトリックの公式的ないろいろの信心行為と比較もしてみました。往つたり来たり、こうしてみたり、ああしてみたりして、絶えず試みていました。

ひとことと言つて、せばめられた空間のなかでわたしが精神的にもせばめられ、以前は苦痛がすなわち幸福の条件であると思つていたことばが、どれほどしゃつちよこばつたことばであつたのかを、わたしは知りました。苦痛は苦痛以外のなにもでもありません。

とにかくひとりの人間が、極度にせばめられた生活空間のなかで、極度にせばめられた偏狭におかれ、ゆがんだ精神状態をはらんだとき、倒錯がやつてきます。一種の曲解、同志が敵に見え、敵が同志に見えてくる、そのような奇異な体験もしました。結局はそれはせばめられているからなのだけれど、そうなつてしまつた生命、そうなつてしまつた自分の心の動き、すなわち愛を拡大させなくてはならないということ、社会的に宇宙的に拡大させなくてはならないということ、そういうとき参禅が役立つし、東学の呪文、老子莊子の思想、または儒教の理気哲学、これらの助けを得たことは事実です。しかし結局はここでもこれが一つの菩薩、一人の君子、一人の人間の視線としてのいろいろな質的、精神的可能性を持つた者たちの、えらばれた者たちの体験によつてのみ可能なのであつて、民衆の心がすなわち生きている宇宙であると言つたとしても、実際は民衆によつてこのようにせばめられた自分の生活のなかで宇宙的なひろい心を、永生不滅であると同時に無窮で惜しみないそのような心それを生かせるようにする遂行方法は、東アジアにおいてはこれといつてありません。

それらの可能なはじまりが、東学においてあらわれましたが、しかしその遂行方法の人格性のようなものが欠如しているのです、その遂行方法が、捕われの身である、つまり切迫しているわたしには、すぐにはやつてこなかつたということ。しかしメシを食うときにつねにわたしはわたしのやり方で準ミサ、つまりチェサ（祭祀）をおこなつていたということ、メシがすなわち天であり、わたし自身の宇宙的な労働の結果であるというならば、わたしまでも含んだ全宇

苦痛は人間をくだいに殺害してしまふということ、人間をだんだんと人間ではない、ある異常な物質に墮落させるということ、おごりかたな信仰が、おもしろいものがたつた独善的な自己主張をしたり、自身自身に対する執着または自分が正しいのだということに対する、しすぎるほどの執着の形態として転落していくのを、わたしはいやというほど体験しました。よつて、おたかい人間、未来に生きる人間としてではなく、いまこの場においてひろい人間でなくてはならないということ、ひろい人間、いまここに捕えられているけれど、捕えられているにもかかわらず塀の外に、鉄格子の外にいる人間と、絶えず霊的な交わりを自然におこなえるひらかれた人間にならなくてはいけないということ、憎悪や怨恨やまたは合理的な社会秩序の未来に対する信心、または一般的な意味の希望によつて、その苦痛を耐えぬくのではなく、この苦痛を耐えぬき、待合室での待ちぼうけのように、ただ耐えぬくのではなく、いまここで、ただちに、わたしのなかに天国を実現しなくてはならないということ、肉体の活動空間がせばめられるということ、捕えられ、監視されるということ、結局は霊的にもせばめられるということだし、わたしを監視する者をわたしが愛することができないという体験、愛そうとしても相手の視線がその愛を受け入れないときにくる挫折感、せばめられた心、せばめられることの極端な形が、怨恨や憎悪として、悪魔的な志向としてあらわれてしまふのだけれど、そんなことを意識しながら、ものすごく焦つたし、それでいちどは仏教におけるところの参禅、呪文であるとか、そういった類の本を読みあさつたのでしよう。そこからわたしは、多くのことを学びました。

宇宙的生命の労働の結果であるというならば、それを悪魔たちの奪取や、悪魔たちの遮断から、わたし自身までも含んだ巨大な宇宙、生きている宇宙である神におかえしするというそのような礼節がすなわち食事であるということ、であるならば、チェサがすなわち食事であり、それはまた東学においていうところのハアソルがチェサを壁にむかつてではなく、自分自身にむかつておこなうということの根本的な神秘であります。

侍天主、すなわちすべての人、すべての生命が自分のなかに天、すなわち神をむかえいれているという思想から、それをもう少し生きて侍天主思想に拡大したのが陽天主、すなわち自分のなかに本来もっている天を、自分の能動的な個人または集団の能動的な努力によつて、その天を拡張させるということ、またそれを拡張させるということは、全社会的、全人類的に拡張させるということなのであるけれど、それが悪魔たちの障害にぶつかつたとき、その悪魔的な障害に対して、血のチェサとして、燃える水、水と火の結合である燃える水としての血、もつとも高貴な宇宙の根源的物質である水、水のなかでも、もつとも最高の物質であるところの燃える水、すなわち血、血のチェサによつて、悪魔たちの支配を解消させながら、自分自身の内部にむかえられ拡張しはじめる天、天のくに、天国を決定的に実現すること、それが祭天主、イ侍天、陽天、祭天思想がすなわち、侍天主、告化定、永世不忘、万事知という東学の根本呪文のなかにあります。

それは、仏教でいうところの三寶すなわち仏寶、法寶、僧寶、または五八教、すなわち仏のおしえ全体を貫く基本思想と恰似してお

ります。しかし、このような思想を単純に圧縮しただけの禪的な、自分のなかに生きている天を崇拜する具体的な形態としての食事、つぎに、マルクス主義においていうところの生産物の生産的回帰や人間の主体、労働主体に労働の結果を、すべての制度的な性格を、革命的に破壊しながら戻していかなければならないとするそのような基本主張、それよりもずっと高くずっと深く、ずっと根源的な思想が提示されることもあるのではないか。

そのなかで、せばめられたその空間のなかで、またせばめられた精神のなかで、わたしがひろい精神によって解放されるためには、そのような礼節を絶え間なく反復するほかには不可能であると考えたのでした。

そこで多くのおしえを得たし、学びもしましたが、しかしそのようにおもひ致ったときそれを押してゆこうとするとき、わたしのからだもひらかれ、いろいろな霊的な体験もしました。

あるときは、決定的にわたしが政治的な目標に執着するそういった霊的執着をやめてしまったとき、放棄してしまったとき、ほぼ一週間にわたって黄金の光を放つ水仙花が、水仙花模様の黄金の光の光芒が、わたしの周辺にみちあふれたこともあり、もちろんそれは錯覚でしょうが、霊的に平穏な状態がやってきたこともあり、そのほかにもいろいろと微妙な経験をしました。

ここですべてをお話することはもちろんできませんが、とにかくそのようないろいろな経験を通して、わたしの心がひらかれようとするとき、朝に夕に、窓の外を眺めながら、小さな草、すずめたちにも元気がい、とあいさつをおくり、友だちになるよう努力もし

ました。

しかしながら、そのような体験の終局にむかっては、結局はそれがカトリックでいうところのミサ、聖体の核心である聖体の問題ではないのか、というところに到達しました。聖体こそ仏教において静観的であったり、菩薩を中心とする、すなわちえらばれた人間を中心にしておこなわれる解脱の遂行方法が、キリスト教においては、一般民衆を中心に集団的に、共同体的に解脱したり、心がひらかれたり、宇宙化すること、または一切の物質的運動と精神的運動を一元的に解決できる、そのような遂行方法がごく大衆的で、またごくた易く、集団的に遂行することのできる方法が聖体成就ではないのか、というところにわたしは到達することができました。

しかしながらそれは論理的ではなく、わたしの内的体験として、わたしの内部から聖体を最後にむかえられたのが約四カ月くらい前になりますが、むかえられたときのその歓喜はいまでも忘れられません。それでいままでもわたしが探し求めていたのが、結局はわたしが出立したその原点に、もう一度帰っていくのだからということを経験しました。

聖体成就こそ、すなわち解脱の遂行方式であり、待天主、陽天主、祭天のそれ。であるならば、イエスの三年間の公生活に圧縮されている、そのなかで生きておられた天の、圧縮的に生きておられた活動の模範、そのなかに入っている全宇宙的な終りも始まりもない宇宙的な神秘が、その三年間のなかに圧縮されたものであり、それが聖体成就として絶頂に到達したのではないか。

大乘知(대승지)の実論において言うところの始覚、本覚、還滅

縁起、チニヨフンス、または東学でいうところの窮極念仏、ヨムブタムボハアンレ、この一切の遂行方法のなかに属している基本神秘は、聖体成就として圧縮されたものではないか、それならば聖体成就は、ヨーロッパにおいて進行している方式とは異なる新しい解釈が加えられるべきではないのか。まずわたし自身がそのように体験し、わたしがまず人間性を喪失せず、まあまあ健康で、気も狂わず、この程度に健康なからだで自分の足で歩いて出てこれたというのも、その一連の神秘に対する執着、神秘に対する限らないとおしき、壊してしまおうとする努力、それがために可能であったのでした。

このわたしの体験が、みなさんに希望や、ある助け、信仰にふたたび回帰できる、そのような刷新のきっかけになればいいし、また神学者たちが東アジアの偉大な知恵、伝統的な知恵の照明、それを実際の体験のなかで学び、把握することによって、東アジアの偉大な、伝統的な知恵たちの照明のそのなかに、その知恵たちの核心的な真理の照明のなかに、はつきりと見きわめて立つときののみ、イエスという人間が、単純にヨーロッパのお話であるなどという程度の次元の人格としてではなく、よりおごそかな、よりひろく深い人類救済の一つの集点であるということが、より明らかになると考えられるし、それは、わたし自身の内的体験として、それを把握したということを申し上げておきます。

II

いままでお話ししてきたことは、わたしが入信することになった直接的な動機であり、一個の人間が信仰を選択するときの、その背

後には、自分ひとりだけではなく、自分の住んでいるひとつの精神の歴史、または共通の歴史、そしてとくに自分自身の近い先祖たち、祖先たちの心の歴史が必ずや作用すると信じたこと。そのことについて少しお話ししてみよう。わたしは過去に、わたしの祖先たちに関して漠然と父や母や、親戚から幼いころの伝説としてのみ聞いてきました。それほど遠くない代の族譜……

韓国には族譜というのがありますが、族譜において確認しながら、父や母から、詳しく三代あるいは四代にわたる根を確認することができました。そのときわたしは少なからず驚きました。つまりわたしが今日悩んでいる宗教的な、霊的な問題、またはそれらを解決しようとして身震いするわたしの一生のある主体が、決してわたし一人のなかではじめておこったことではなく、わたしの祖先たちの暗い昔に、その時代の苦痛、その心の空虚感、そのようなことからすでにまじまじといたったことをわたしは確認することができました。

具体的な例をあげますと、わたしの曾祖父つまりわたしの祖父の父は、いわゆる韓国の太平天国運動ともいえる甲午東学農民戦争、東学革命のとき、全羅道の金堤の近くで農民革命軍として参加し処刑されました。

やはり東学徒であったのです。東学思想がなんであったのかということは、歴史家たちがみな知っていることですが、簡単に言いますと、人乃天、人がすなわち天である、よって人を天のように見做せ、というのが簡単なその宗旨であります。教理の核心です。曾祖母がなぜこのような信仰に身を捧げることになったのか、だい

たいは理解がいくのですが、元来、わたしたちの祖先が全羅南道の道西地方の岩泰島アムテドというところにくらしておりました。若干の土地をもつていたということです。それが五代、六代、七代にわたり不吉な兆候があらわれはじめました。それは、高祖以前の何代前の人であつたのかは知りませんが、その人が家から出てくる大きなへびを殺してしまつてからというもの、家が傾きはじめたという伝説があります。これはひとつの伝説にすぎませんが、それ以前は相当裕福にくらしていたようです。しかしだからといって貴族だつたというわけではなく一所懸命仕事して畑を耕し、自分の稼いだお金で家を富まし、自然農民——ヨーロッパ社会の経済史において見られるブルジョワでした。

それは近代市民の一つのはしりであつたのですが、そうこうしているうちに、もっと大きな地主に土地を奪われ、官吏たちに搾取されたためその島を離れ、全羅北道栗浦ウルポに上陸し、金堤に入り、そこに定着したようです。しかしそのときにはもはや家は完全に滅び、貴族でなかつたためによる身分的な制約、その不満、それがために東学の乱に参加したのではないかと思われまふ。

それはともあれ、その人はとても背が高く目が大きくて、とても良い男だつたということです。また声が、ちょうど鐘の音のようで、大きな人だつたそうです。その人が東学の乱に参加し、処刑されて死にました。その後わたしの祖父は、そこを追われ、全羅南道の靈光法聖浦ウングンポというところにとどりつき、そこで隠れたくらしをしながら、祖父は天主学、当時の西学、現在のカトリックに入信したといひます。

しかし常に父は、過去に自分が洗礼を受けたということをお話して話してくれたのを覚えていて、また母方の方では、外高祖父、つまりわたしの母方の祖父はソウルでずいぶん高い丞相の位にあつたといひます。丞相の位といひるのは、一種の宰相なのですが、相当な有識者で、儒教——孔子の学問に精通していた人でした——ところがその人が、西学的カトリックを秘密裡に信奉するようになりまふ。おそらくわたしの考えでは、高宗当時であつたと思ひます。その当時、両班のなかでカトリックを信奉すると、ほとんど三代を滅ぼすほどの厳しい鉄槌を受けておりました。

案の定、その人は官職をはく奪され、家は滅び、濟州島チエジュドに島流しにされたということです。いまでもわたしの家にのこつていふ伝説なのですが、その人が濟州島の滝の上に小さなあずま屋をたて、その滝の音をいつも聞きながら天主経をととなえたといひます。

その滝の水にむかい、滝の水音と張り合ひながら大きな声でお経をととなえたという伝説がいまでも残つておりました。非常にうっせきとした憂うつな流刑をその人は、そういう仕方であつたのですが、その後、そのつぎの代までも天主信仰が維持されたようなのだが、祖父の時代になつて、おそらく冷淡になつたのだと思ひます。

それで濟州島から海南ヘナムを通つて木浦にはいりました。そのほかに母方の祖母の家門といひのがまた貴族ではなく土豪、つまり地方の裕福な地主、地主というよりも一種の新しくあらわれはじめた自作農でありながら同時に商業を営む、そういう人だつたようです。これを、韓国における近代資本主義の芽が見えたとするのが、最近の史学界における正論ですが、そうしてみるとブルジョワの一部

しかしその当時靈牌、つまり祖先の位牌、位牌は儒教における礼節においても重要な神として見做す祖先崇拜の象徴であるのに、その靈牌壺をこわしてしまつたということです。その当時、カトリックが迫害されたもつとも重要な原因がその靈牌壺の破壊からはじめたのですが、それは仏教に対する全面的な挑戦だつたのでしよう。

それで祖父は一族から、すなわち家から追い出されて日本に逃げ、それでミシンの技術を学んで帰り、服をつくり、その一連の技術によつて家業をおこしたということです。その後、わたしの父、父の兄弟、そして親戚たち、伯母と、すべて幼いときに天主教に入信しました。洗礼を受け、いまでもわたしの父の兄弟、祖母、祖父、そしてわたしの親戚のほとんどが天主教の墓地にねむつています。ところがわたしの父は、その後日本にわたり、電気技術を学ぶことによつて近代的な科学技術に接する機会があつたためか、カトリックには冷淡になりました。

それでわたしは、カトリックというのを知らずに幼いころを過ごしました。しかしいま記憶にのこつていふのは、伯母につれられてとても幼い時分に、聖堂に——とても高いところにある聖堂なのですが、そこへ何度か行きました。ところがその光景が相当に暗く恐かつたようです。鼻のところがつた神父さまが出てこられ、何か言つて……そのときは椅子などなく床板にそのまままひぎまひで坐つたのですが、それがまたとても苦痛だつたのを覚えていひます——それでそこはとても恐いところなのだと幼いころに思つたのを覚えておひます。

分であつたといひます。すなわち市民だつたのです。その母方の祖母の家の信仰全体は仏教でした。とても篤実な仏教徒で、母方の祖母はお寺で亡くなり、その人が亡くなつたとき三年間、お経をととなえながらお膳をあげておりました。その記憶がわたしにはいまでものこつており、いまでもわたしは千手経のようなものをととなえることができまふ。

しかしそのときもわたしは、仏教が何であるかは知りません。ただそれは、東洋人全体が潜在的に仏教信者であるといふことだし、意識の底に仏教的なものがつねに敷かれており、文化全体が仏教にそまつていふことはたしかです。

このような歴史の全体をみると、今日わたしがもつていふカトリック信仰、このようなものが決してわたし個人の痛みや、わたし一代、わたしひとりの生の歴史からはじまつた苦痛や痛み、わたしといひおしき、または欠乏感ではなく、わが国のいわゆる西勢東漸、西洋が東洋に浸透しはじめながら東アジア、とくに中国文明が衰退し、過渡的な時期にあつた人間の精神の混沌——この状態から、性理学、朱子学等儒教の硬化したイデオロギーが支配した時代に、民衆が限らない追求をもとめ解放の小さな糸口を探してさまよつたときにあらわれた東学、仏教、とくに天主教これらに対する民衆全体の渴望、そしてわたしの祖先たちの渇き、これらがわたしのなかに伝承されたのではないかと、わたしは民衆的な解放の追求、東アジアの民衆の解放の追求としての、西洋人たちには理解することのできない、カトリックに対するあるビジョン、カトリックに対する関心、これらと伝來的な民衆宗教としての仏教と儒教と老荘思

編集後記

想が、カトリックの衝撃を結合して創造的に民衆宗教として提示した東洋、人乃天思想―がみな等しくわたしに伝承され、わたしのなかでブクブクとわきたつのですが、それをわたしが、もしも創造的な霊的効力として転換できるとしたら、わたし個人としては、それは心の成功であり、精神の完成に接近することもできれば、この社会や人類に、わたしの経験を通してある創造的結末を通して、何か寄与できるのではないかという思いがあります。

さきほども言ったように、わたし自身の歴史、わたし自身の信仰の歴史と、わたしの祖先たちを中心にしたこの国、とくに東アジア全体をおそったパニック、その精神的な混沌のなかでおこった思想的な渴望、これらが結合されることによってわたしのいまの信仰、わたしの現在のある根源的なものに対する考えを決定したのではないかと思えます。

▼侍天主 造化定 永世不忘 万事知
(神をむかえいれると、神の造化に参与することになり、神をいつまでも忘れることがなければ、万事が自然とわかるようになる)

一九三六年七月一九日、叛乱をおこした軍隊が、バルセロナ市中央に進撃します。だが、次の日には、武器をとった民衆が軍隊を制圧し、共和国体制ものりこえたコムニオンをつくる。それをきっかけに、各地で村や工場がコムニオン化されて、スペインの短い夏がきます。

バスやトラックに鈴なりの若者たち。旗をふり、棒きれで車体をたたき、うたいながら、どこへいくのか。これは、昨年の光州コムニオンの写真。

歴史のなかで、くりかえしあらわれる、民衆がうごく瞬間。組織された軍隊でさえ、せきとめることのできない人びとの流れに、こぼにすることはできなくても、たしかに見えているにちがいない行く手の景色を、私たちにもかいま見させてくれる歌もある。

金芝河の「出獄所感」にもあるように、一家族の年代記さえ、民衆決起の歴史とからみあい、ある代では一時そこからはなれることがあっても、次の代では、はなれて得た経験もあわせて、その流れにもどってゆくのがみられます。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留をお願いします。

住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第三巻第六号

一九八一年六月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ